

Economic Indicators

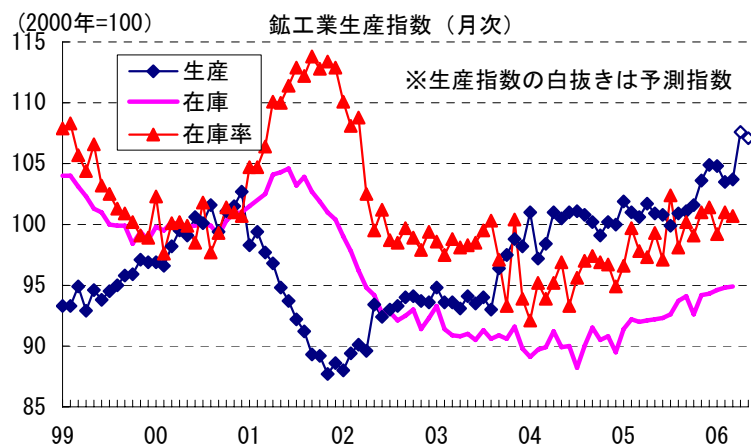
定例経済指標レポート

指標名: 鋳工業生産指数(2006年3月)

発表日2006年4月28日(金)

～4-6月期も生産は増加基調～

第一生命経済研究所 経済調査部
 担当 副主任エコノミスト 長谷山 則昭
 TEL : 03-5221-4525



	生産 前月比%	出荷 前月比%	在庫 前月比%	在庫率 前月比%
05年3月	▲ 0.4	0.7	▲ 0.2	▲ 1.9
4月	1.1	2.2	0.1	▲ 0.5
5月	▲ 0.8	▲ 2.2	0.1	2.1
6月	▲ 0.1	1.3	0.1	▲ 2.2
7月	▲ 0.9	▲ 0.4	0.3	5.5
8月	1.0	1.6	1.2	▲ 4.2
9月	0.2	▲ 0.6	0.4	2.1
10月	0.5	1.2	▲ 1.6	▲ 1.1
11月	2.0	1.1	1.7	1.9
12月	1.3	0.9	0.1	0.4
06年1月	▲ 0.1	0.2	0.3	▲ 2.2
2月	▲ 1.2	▲ 2.0	0.2	1.8
3月	0.2	0.2	0.1	▲ 0.3
4月	3.8			
5月	▲ 0.5			

←予測指数 (出所: 鋳工業指数、経産省)

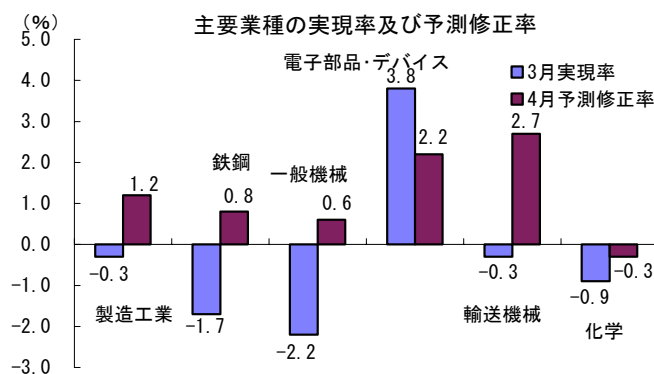
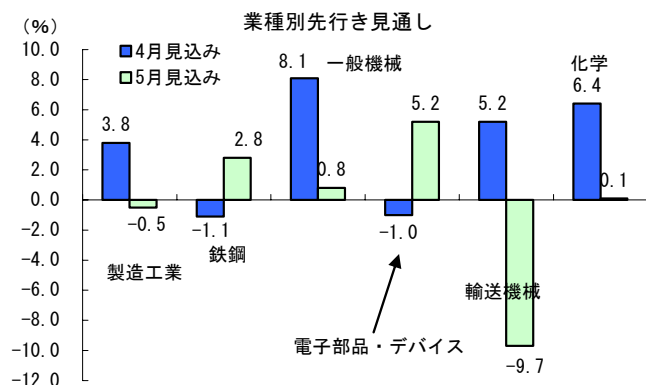
○3月の鋳工業生産は前月比+0.2%と3ヶ月ぶりに上昇

3月の鋳工業生産指数は前月比+0.2%となった。ほぼ市場コンセンサス（前月比+0.1%、レンジ同▲0.9～+1.5%）どおりの結果となり、3ヵ月連続の減少は回避された形となった。上昇に寄与した業種としては輸送機械工業（前月比+3.8%）、電子部品・デバイス工業（前月比+3.5%）などが挙げられる。輸送機械は北米向けなどの自動車輸出が好調なこと、電子部品・デバイスは前月マイナスとなった反動や半導体需要が好調だったことから増加した。

なお、05年度では前年度比+1.6%と04年度の同+4.0%から減速した。ただし、これは年度前半の在庫調整の影響による落ち込みが大きい。06年1-3月期の生産の前年比は+3.2%となっているように、年度後半の鋳工業生産は増加基調が明確となっている。

○4-6月期も増加基調、3四半期連続でプラスは確実

1-3月期の鋳工業生産は10-12月期対比で+0.6%となった。2四半期連続の増加であり、鋳工業生産は増加基調にあるとの判断に変わりはない。先行きの景気を見る上で注目となる予測指数は4月が前月比+3.8%、5月が同▲0.5%となった。4、5月が予測指数どおりに推移し、6月は前月比横ばいと仮定すると、



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

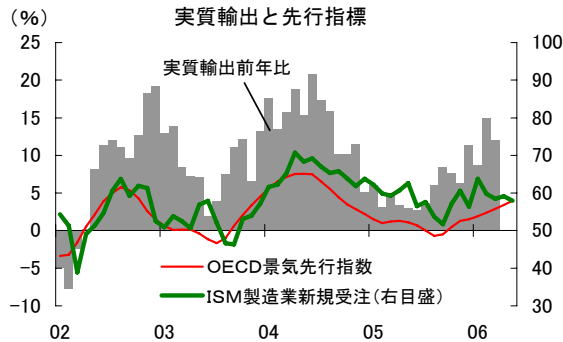
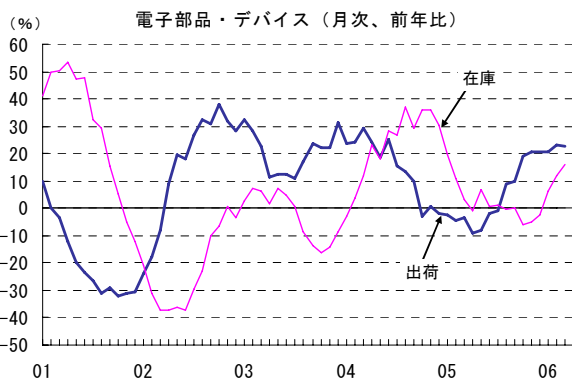
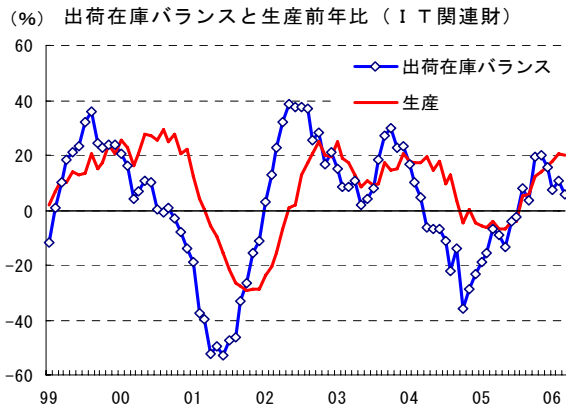
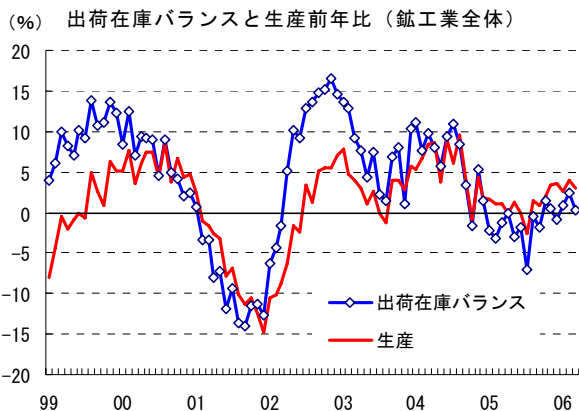
4-6月期は前期比+3.2%となる。さすがに前期比+3.2%は下回ると考えられるものの、4月は予測修正率がプラスとなったこと、実現率もマイナス幅が縮小傾向にあることなどを考えれば、4-6月期は前期比+2%程度で着地するとみられる。4-6月期も鉱工業生産は増加基調を辿る公算が大きいと考えられる。

○年央以降には生産の増加ペースが鈍化する可能性があるが、先行きも底堅く推移

海外経済の堅調な推移を背景に輸出は好調さを持続しており、鉱工業生産には当面押し上げ材料となるだろう。加えて個人消費や設備投資といった国内需要も堅調なことも踏まえると、鉱工業生産は好調に推移する可能性が高い。ただし、年後半以降には、W杯終了によってIT需要が反動で減少する可能性が否定できないことや米国経済の減速にともなって輸出の拡大ペースが鈍化することから鉱工業生産も増加ペースが鈍化するとみられる。

この観点からは、IT分野の出荷在庫バランス（出荷の前年比の伸び-在庫の前年比の伸び）が低下傾向となっている点には留意が必要である。IT関連財の多くが含まれる電子部品・デバイス工業の出荷の前年比と在庫の前年比をそれぞれ見てみると、出荷は高い伸びが続いているものの、在庫の伸びが大きく上昇している。在庫の増加が、出荷在庫バランスの低下に寄与していることが分かる。高い伸びが続いているIT関連財の出荷については、6月に開催されるW杯の終了によってデジタル家電などの最終需要に反動減が起これ、伸びが鈍化する可能性が指摘できる。また、在庫については、出荷が企業の想定以上に落ち込んだ場合、在庫の増加ペースがさらに拡大することも考えられる。出荷・在庫の両面から出荷在庫バランスの低下ペースが加速する可能性がある点は先行きの生産にとってリスクである。また、海外需要が日本の生産活動に与える影響は大きいことから、輸出の先行指標となる米ISM製造業新規受注やOECD景気先行指数も先行きの生産活動を見る上では重要なポイントとなろう。

今後の鉱工業生産を展望してみると、海外需要については大幅に減退する兆候はみられていない。IT需要についても、個人消費の回復など国内需要が底堅く推移すると見込まれることから、需要が減少したとしても軽微で済むと考えている。急激な円高進行などのリスクもあるが、年央以降も大幅な減速とはならず、鉱工業生産は先行きも底堅く推移する見込みだ。



(出所) 日本銀行、財務省、OECD、全米供給者協会
(注) OECD景気先行指数、ISMの先行期間は5カ月とした

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。